

第1章 実践研究

遠隔授業における ADHD のある学生への合理的配慮 — 本学の現状と課題を中心として —

黄 淵 熙^{1), 2)}

遠隔授業の実施に伴って相談需要が増加した ADHD のある学生の支援を中心に、相談件数及び相談内容の現状についてまとめた。また、相談内容に対して本学で行った支援について、他大学の支援を参考にしながら、今後の課題について考察した。

キーワード：ADHD、遠隔授業、合理的配慮

1. はじめに

新型コロナウイルス感染症の拡大により、国内のみではなく、世界各国では修学的手段に大きな変化が生じている。国内では3月2日から政府の要請により全国の一斉臨時休業が行われ、4月7日に政府の緊急事態宣言が行われたことや4月16日に全都道府県が緊急事態措置の対象となったこと等を受け、大部分の学校が5月末までの臨時休業を行った。特に、高等教育機関においては小・中学校及び高等学校の授業が本格的に再開し始めた6月以後も遠隔で行われる授業の割合が高く、「大学等における後期等の授業の実施方針等に関する調査結果」（文部科学省、2020）によると、9月現在、全面対面の授業実施形態を取っている大学は19.3%、対面と遠隔を併用している大学は80.1%に上る。本稿では、遠隔授業として「オンライン同時双方型」と「オンデマンド型」の授業の両方を含むこととする。

遠隔授業は「学生が自分の好きなペースで学習でき、復習もしやすい。」「学生から遠隔授業の方がかえって発言しやすいという声がある」など評価する意見もある反面、「学生の通信環境・ICTスキルの問題」や「学生側の学ぶ意識・メンタルケアの問題」などの課題も見られる（『朝日新聞』、2020.8.24朝刊）。

一方、修学上様々な困難を抱えている障害学生においては遠隔授業等において障害等に起因して生じしやすい特徴や課題がある。遠隔授業においては物理的な移動を伴わないため、車いす等の運動障害のある学生にはメリットとして作用する場合もある。学習障害（以下、

1) 東北福祉大学教育学部教育学科

2) 東北福祉大学教育・教職センター特別支援教育研究室

LD)のある学生の場合、オンデマンド型遠隔授業において動画を途中止めたり、繰り返し視聴したりすることができるため分かりやすくなることもある。

また、社会不安障害のある学生のように登校する自体が障壁になっている場合は、遠隔授業の方が対面授業より修学が容易になることも報告されている (Lindberg, 2020)。

しかしながら、遠隔授業は視覚情報や音声情報が通常の講義よりも煩雑となりやすいため、視覚・聴覚などの感覚障害のある学生 (筑波大学 on line: 20200409-1) や読字障害、ADHD など学び方が異なる (learning differences) 学生の修学には否定的な影響を及ぼすと指摘されている (Lindberg, 2020)。

筆者は、本学の発達障害学生の相談を担当している立場から、遠隔授業が始まってからの発達障害学生の相談の現状及びその内容を ADHD のある学生を中心に報告する。

さらに、本稿では本学で行った主な支援と今後の課題について他大学の支援を参照しながら、考察することを目的とする。

発達障害学生の中でも ADHD のある学生に注目する理由は、筆者の経験及び、先行研究 (Heller, 2020 など) から障害の特性上、遠隔授業による否定的な影響が最も目立つ障害であると考えられるからである。

II. 研究方法

筆者が記録した、2019年度 (2019年4月～2020年3月) と2020年度 (2020年4月～2020年12月現在) の発達障害学生相談記録を比較することで ADHD のある学生の相談件数の推移及び主な相談内容・対応についてまとめる。

III. 結果

1. 発達障害学生相談件数及び障害種別件数

本学においては発達障害学生の相談窓口 (図1) がいくつかあり、学生が相談の申し出を行う場合、発達障害学生支援を担当する特別支援教育研究室に直接相談を申し込むことはほとんどなく、保健室やウェルネス支援室を通して相談を申し込み、特別支援教育研究室に紹介されることが多い。何らかの不応は感じているものの、発達障害という自覚を持たない場合、ウェルネス支援室で初回相談を行うことが多く、その後、発達障害による不応や不調の可能性が高い場合は、筆者が所属する特別支援教育研究室に紹介され、面談につながるケースが多い。しかし、場合によってはウェルネス支援室で相談が終結したり、ゼミ担当教員との相談、医療機関への直接的受診などにつながるケースがあるため、筆者が面談を行った人数が本学の発達障害学生すべてを網羅した数字とはいえない。

筆者が相談を行った相談人数 (疑いも含む) のみを2019年度と2020年度現在で比較し

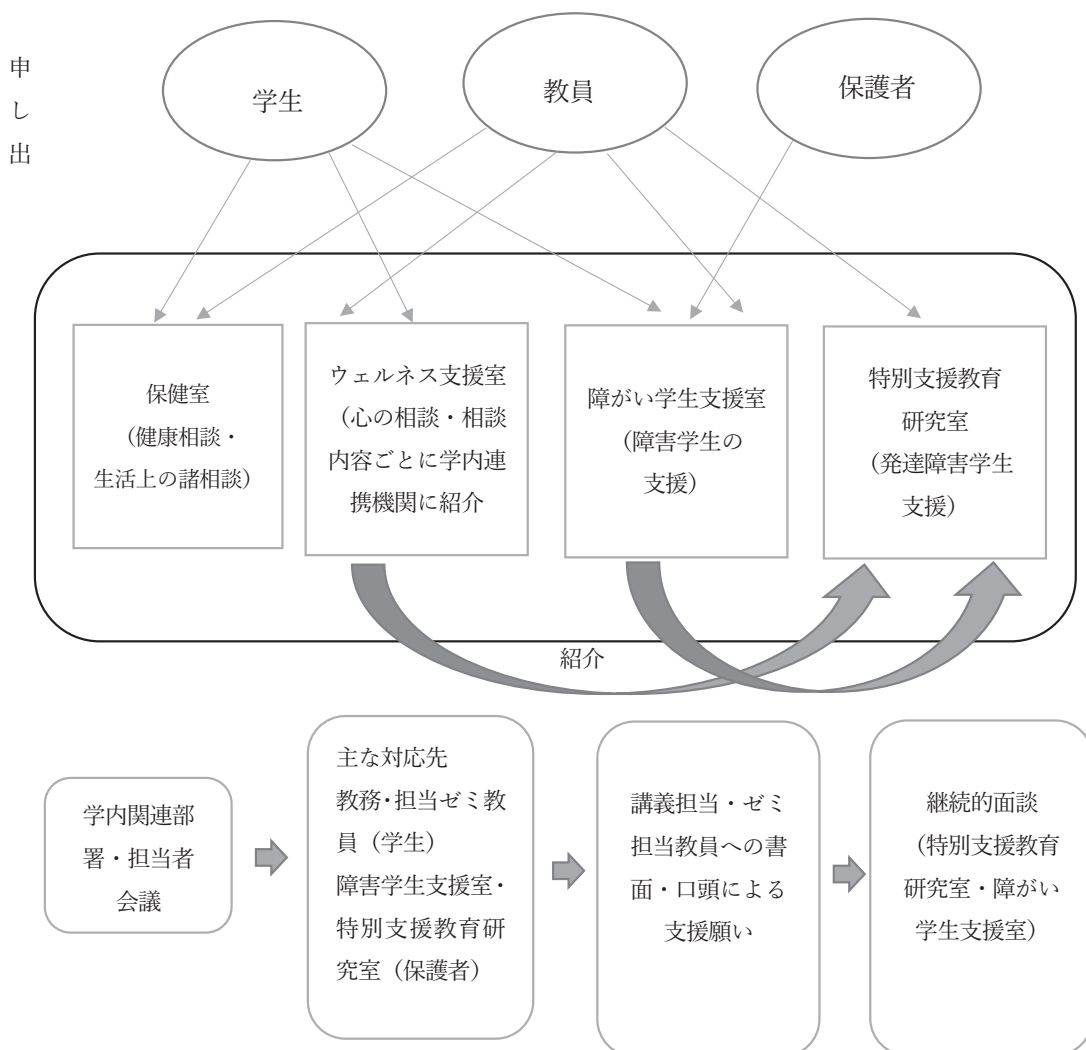


図1 本学の障害学生相談及び支援体制

てみると、2019年度は、8ケースの相談があり、そのうち、ADHDが1名、自閉スペクトラム症（以下、ASD）が7名であった。一方、2020年度は、6ケースの相談があり、そのうち1ケースがLDで、残りの5ケースがADHDであった（図2）。また、初回相談を申し込んだ時期別では、2019年度には5月、6月、7月に相談が集中していることに対して、2020年度には6月、7月、9月に相談件数が多くなっている。

もう一つの特徴としては、2019年度にはゼミの担当教員の勧めによる相談が2件であったが、2020年度はすべて学生本人からの申し出による相談であった。

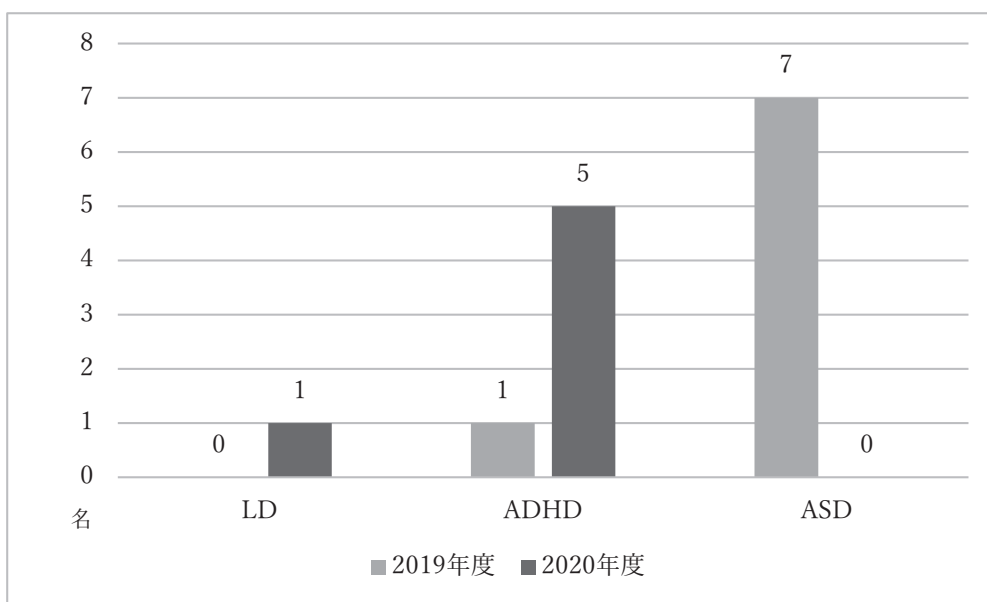


図2 障害種別相談に訪れた人数

2. 相談内容

ADHDのある学生の遠隔授業と関連した相談では、最初から自分の問題について明確に語ることは難しく、「どうしたらよいかわからない」「配信された動画の期限がすぎてしまい、授業が見れない」「前期、まったく単位が取れなかった」など、漠然としていたり、本人が困難の内容についてよく説明できないことが多い。話をしているうちに、出てくる内容をまとめると、困り感にいくつかのパターンがあることがわかる。ADHDのある学生からの主な相談内容を表1にまとめた。

表1 ADHDのある学生の遠隔授業における主な相談内容

区分	内容
注意集中の問題	<ul style="list-style-type: none"> 集中できる時とできないときの差が激しく授業の視聴が進まない。 対面授業の場合は、一番前の席に座るなど、集中力を高めるための工夫をしてきたが、遠隔授業の場合は、パソコンの前でどう注意を保ち続けたらよいかわからない。 家だと、目に入るものが多く、やらなければならないものに手が出せない。
時間管理	<ul style="list-style-type: none"> オンデマンド型授業の場合、視聴を後回しにしてしまう。 リアルタイムの授業（双方向性）の場合、授業日がいつなのか覚えられない。
タスクの管理	<ul style="list-style-type: none"> 課題の提出ができない（教員により課題の提出先や締め切りが異なるため、整理ができない）。
その他	<ul style="list-style-type: none"> 授業を視聴することを何度か忘れると、あきらめて全く見なくなる。

主な困り感としては、注意集中と関連した問題、時間管理の問題、課題などやるべきことの整理及び優先順位の付け方などへの困難が挙げられた。これらの困難は、対面授業においてもADHDのある学生に表れやすい問題である。しかし、遠隔授業になると、自宅という環境の故、刺激が多く、時間管理やスケジュール調整などをすべて自分で行わなければいけないため問題がさらに深刻化していると考えられる。

3. 本学での対応

ADHDのある学生への対応は、相談内容をもとに個別的行われるが、遠隔授業と関連し、いくつか共通する対応を行った。まず、注意集中の問題に関しては、ポモドーロテクニックを紹介した。ポモドーロテクニックとは、1980年代にイタリア人のフランチェスコ・シリロによって考案された時間管理術で、タイマーを使用し、一般的には25分の作業と短い休息で作業時間と休息時間を分割する。1セットを「ポモドーロ」と呼ぶ（Cirillo, 2018）。このテクニックの具体的な手続きは以下の通りである。

ステップ1：実行するタスクを決める。

ステップ2：タイマーを25分に設定。

ステップ3：タイマーが鳴るまでタスクを行う。

ステップ4：タイマーが鳴ったら作業を終了し、「今日やること」シートにチェックマークを付ける。

ステップ5：5分間の休憩を取る（その際、深呼吸したり、瞑想したり、コーヒーを飲むなど、仕事とはまったく関係のないことをして脳を休ませる）。

ステップ6：ポモドーロを4回した後に長い休憩（20～30分）を取る。

ポモドーロテクニックを紹介した学生には、① タイマーが鳴るまでは、携帯を見るなど学習と無関係な行動をしないこと、② タイマーが鳴ったら、必ず学習や作業を中止すること、③ ステップ6の長い休憩時は、外に出て体を動かすこと、などを提案した。また、どうしても自宅では集中を保つことが難しい場合、対面授業の間の待機の部屋として大学が認めている教室を利用し、学内で遠隔授業の一部を視聴することを許可した。

次に、授業日を忘れたり、オンデマンド型授業の視聴を後回ししたりする時間管理の問題への対応として遠隔授業管理表を作成し、記入するようアドバイスした。遠隔授業管理表の例を表2と表3に示す。

優先順位付けに困難を示す学生には、やることリストを作成し、その日のやるべき仕事の優先順位を意識するようアドバイスした。やることリストには、「今日」、「1週間以内」、「1

表2 遠隔授業管理表の例（全体）

	科目A	科目B	科目C	科目D
授業方法	Google meet (meet.google.com/ yeb-aaau-mkn)	動画オンデマンド	動画オンデマンド	資料提示
課題提出方法	EdTrackのメッセージ	ワードで教員のメールに	なし	EdTrackのアンケート
評価方法	出席とレポート	動画資料率及びレポート	毎回の確認テスト	レポート
視聴（予定）曜日	水曜3限	金曜2限（変更可）	火曜5限（変更可）	月曜（変更可）

表3 遠隔授業管理表の例（科目別）科目A（リアルタイム授業）

	授業日時	出席（ <input checked="" type="checkbox"/>)	レポート期限	レポート提出（ <input checked="" type="checkbox"/>)
1回目	5月20日（水）3限	✓	6月13日12時	✓
2回目	5月27日（水）3限			
15回目	8月26日（水）3限			

か月以内」、「時間があれば」の枠を用意し、やるべきことを記入し、やり終わったらチェックを入れるようにした。「今日」やることリストにあることを優先的に行う習慣をつけることと、1日のはじめと終わりにリストを見直すことを意識するようにした。

IV. 考察

本稿では、発達障害の中で、遠隔授業の実施に伴って相談需要が増加したADHDを中心に相談件数、内容、対応について述べた。

相談件数に関しては、ADHDのある学生の相談が前年度に比べて多くなっており、遠隔授業下でのADHDのある学生の困り感が大きいことが推測される。また、相談の時期に関しては、前年度と同様、授業が始まって1,2か月後に困り感を感じ、相談を申し込んだ学生が多かった。前年度との違いの一つは、ゼミの担当教員など教員側の気付きにより相談に訪れたケースはなく、すべてが学生自ら申し出たケースであった。これは、学生の自主性が高まったというよりは、遠隔授業により教員が学生の困り感に気付く機会が減ったと解釈することが妥当であろう。

本学のADHDのある学生への対応は、本人へのアドバイスと授業担当教員への配慮要請を中心に行われている。

相談の中でのアドバイスとして共通するものは、「注意の問題への対応」「時間管理」「タスクの管理」であった。

筆者はADHDのある学生の共通の困り感である集中困難への対応として、ポモドーロテクニックを紹介している。このテクニックの本来の目的は、集中する時間を明確にすることで仕事の効率を高めることであるが、ADHDのある学生には25分ごとに休憩を入れることによる体を動かす機会を作る意味も大きいと考えられる。ADHDのある学生の場合、対面授業では休み時間が明確であり、教室の移動などで体を動かすことができるが、遠隔授業ではずっと自分の机に座っていて、体を動かせる時間が一定ではなく、それが集中を妨げる一つの原因であると考えられる。

時間と課題の管理のためには遠隔授業管理表を提案した。しかし、ADHDのある学生の中では、一度、遠隔授業管理表を作るものの、声掛けがないと、継続することが難しい場合が見られた。さらに、何度か授業の視聴を見逃すと、あきらめてしまい、受講及び課題の提出が全くできなくなる場合もあった。

このような問題を解決するためには、学生への継続的なつながりを持つことで孤立を防ぐ必要があると思われる。

筑波大学のDACセンター（ダイバーシティ・アクセシビリティ・キャリアセンター）では、多様な発達特性のある学生同士が集まるグループ活動を通して、「自己理解・他者理解」、「対処法の発見」、「友人・コミュニティづくり」を行っている（筑波大学 on line: 20200409）。グループの種類も多様で、発達障害学生の当事者が発達障害の特性により日々感じること、思うことなどを話し合う「発達障害者当事者グループ」や一人だとやる気が出ない学生のための自習室として「もくもく作業する会」、生活リズムを整えることが難しい人のための「朝活ミーティング」などが用意されている。遠隔授業下ではこれらのグループ活動を月1回のペースで、オンラインで行っている。

また、University of Southern California (Lindberg, 2020) では、発達障害学生の支援を行うUSC Kortschak Centerが毎日オンラインでグループミーティングを主催し、学生の質問に答える活動をしている。また、発達障害学生同士がお互いの経験や対策を共有できるよう学生サポートグループも運営している。

本学では、発達障害学生の専任支援部署や担当者がいないこともあり、相談後の学生の状態に対するフォローアップや行った対応の有効性を確認することが難しいのが現状である。

今後、遠隔授業が継続されるのか、全面的に対面授業に変わるのかは不明であるが、遠隔授業下での発達障害のある学生への支援にはいくつかの課題があると考えられる。まず、相談系統を明確にすることで「どこで相談したらよいのかが分からない」という学生の不安を軽減させることである。発達障害の特性上、不眠などの身体的な症状やうつなどの精神的症

状を伴うことが多いため、相談窓口を一つに統一することは難しいと思うが、新規相談を申し込む学生が分かりやすい相談ルートを示す必要があると考えられる。二つ目は、相談で終わるのではなく、相談後のフォローアップ及び学生同士のグループ活動などを通してADHDをはじめとする発達障害学生の孤立を防ぐことである。最後に、他大学とも連携しながら、遠隔授業下で表れやすい障害種別の特性に関する情報を収集し、予想される困難に対して予防的な働きをすることも今後の重要な課題であると考えられる。

文献

朝日新聞・河合塾共同調査「ひらく日本の大学 2020年度緊急調査」、『朝日新聞』、2020年8月24日、朝刊、p.19

筑波大学 (2020) 筑波大学アクセシビリティ「障害のある学生の受講を想定した遠隔授業の対応について (ver.1)」<https://dac.tsukuba.ac.jp/shien/20200409-1/> (最終閲覧日2020年12月25日)

文部科学省 (2020) 今後の国立大学法人等施設の整備充実に関する調査研究協力者会議 (第5回)「コロナ対応の現状、課題、今後の方向性について」.2020.9.24. https://www.mext.go.jp/content/20200924-mxt_keikaku-000010097_3.pdf (最終閲覧日2020年12月25日)

Cirillo, F. (2018) : The Pomodoro Technique: The Acclaimed Time-, management System That Has Transformed How We Work. Currency.

Heller, C.A. (2020) : You Never Registered for Remote Courses, But Now You're Taking Them. CHADD.org. <https://chadd.org/you-never-registered-for-remote-courses-but-now-youre-taking-them/> (accessed Dec 25, 2020)

Lindberg, E. (2020) : College students with learning disabilities grapple with pandemic's effects. USC news. <https://news.usc.edu/174651/covid-19-support-usc-students-learning-differences-disabilities-studying-pandemic/> (accessed Dec 25, 2020)